

陳舜臣さんを語る会通信

NO.19 Oct. 2020

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2020年10月1日

直木賞受賞作（昭和43年下半期）『青玉獅子香炉』 せいぎよくししこうろ

本号では第60回直木賞（昭和43年下半期）を受賞した『青玉獅子香炉』を取りあげます。初出は、昭和43年『別冊文藝春秋』105号です。（編集委員 橘雄三）

《 1. 『青玉獅子香炉』の時代背景 》

1912. 1～ 中華民国成立 首都 南京 孫文臨時大總統
1912. 2～1916. 6 袁世凱 宣統帝の退位を実現させ、臨時大總統、大總統、皇帝（3ヶ月ほどで失脚、憤死）

十二年にわたる北京政府軍閥時代（黎元洪、馮国璋、徐世昌、黎元洪、曹錕、段祺瑞、張作霖）

1924. 10 馮玉祥、クーデターをおこし、北京を掌握。

溥儀、紫禁城退去

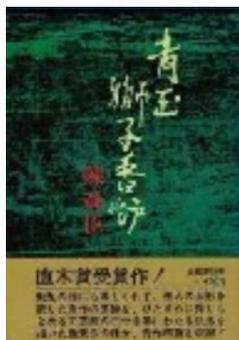
1924. 12 孫文入京（1925. 3. 12 死去）

1928. 6 国民革命軍 蒋介石北京入城（北伐完了）

日中戦争（1931. 9. 18 柳条湖事件 1937. 7. 7 盧溝橋事件 37. 12. 13南京占領 1945. 9. 2日本降伏）
柳条湖事件（9・18事変）がおこると、戦雲は早晩、華北に及ぶことが憂慮され、博物院所蔵の民族の文化遺産を救うべく、「文物遷運」が決定される。

《 2. 登場人物&あらすじ導入 》

琉璃廠に潤古堂という工芸品を扱う店があった。この店の雇われ店主の名を王福生といった。王福生には、妙な信条・癖があった。「玉がほんとうに生きるためには、人間の膚からエッセンスを吸い取らねばならない。それも女性の膚である。彼は彫りつつある玉を、いつも女性に抱かせた。そればかりではなく、仕事中は近くに女性を坐らせた。」



文藝春秋社版表紙

1923年の春、ときどき書画を売りに来る顔見知りの宦官が、写真そっくりの香炉を彫ってほしいといて来る。本物の香炉は廢帝溥儀の收藏品であったという。王福生は、贋物をつくることに気がしなかったが、本物が、いま、中国にないことを知り、この依頼を引き受ける。

直後、福生は脳溢血で倒れ、半身不随になってしまい、弟子の李同源がこの仕事を引き継ぐことになる。同源は、主人・王福生の信条・癖の役を演じる若い未亡人・程素英と、依頼の香炉を彫る。

そんな日を重ね、「青玉獅子香炉」は完成するの

だが…。時代に翻弄され、「青玉…」を追って転々とする李同源の人生がはじまる。

次ページのような経路を辿り、最後の場面はアメリカでまっていた。李同源は程素英と共にアメリカに渡る。二人はともに六十近くになっていた。

登場人物

王福生	北京琉璃廠にある工芸品を扱う潤古堂の店主。翡翠や玉の加工彫刻の名人
李同源	主人公。王福生に玉器彫りの腕を見込まれて潤古堂で働く。脳溢血で倒れた主人に代わり、青玉獅子香炉を彫る。王福生が病死すると、清室善後委員会（1925年、故宮博物院に発展）に、紫禁城の収蔵品を整理する仕事を得て、店を出る。程素英への想いが太い縦糸の一本
程素英	王福生の息子の嫁。若い未亡人。義父、王福生が死に、新しい店主が決まると、知人、莊念偉の口利きで李同源に清室善後委員会の職を紹介し、自分も上海に去る。文物遷運中、重慶で莊念偉と再婚
莊念偉	程素英の元同僚。清室善後委員会では李同源の上司
野口某	日本人の古美術ブローカー。潤古堂のオーナー。30年を経て、台湾で李同源と再会。李同源に香港店を任せる

『青玉獅子香炉』に描かれた「文物遷運」経路

王福生が亡くなり、店主が替わったこともあって、李同源は潤古堂を辞め、程素英の紹介で清室善後委員会で働くことになります。この委員会は、紫禁城内の収蔵品を整理して、博物館を作るという目的をもっていました。その縁で、やがて、李同源は自身が彫った獅子香炉と出会います。

1925年10月、故宮博物院が発足し、李同源を含め、委員会の職員のほとんどが博物院に入ります。

1931年、柳条湖事件（9・18事変）がおおると、戦雲が華北に及ぶことを憂慮し、博物院所蔵の文化遺産を救うべく「文物遷運」が決定され、李同源も遷運に随うこととなります。

概略は下の枠内のとおりです。

■ 『青玉獅子香炉』に描かれた「文物遷運」経路（朱字は、李同源が文物と行動を共にした経路）

- ①1933年 北京→浦口→上海
 - ②1936年、南京分院が完成し、1937年にかけて 上海→南京
 - ③1937 南京→漢口 → 宜昌 → 重慶 → 樂山
 - ④1947.3 重慶集中→⑤1947.12 南京全数帰還
 - ⑥南京に帰還した文物の内、結果として、厳選した三千箱ほどが、1948～49年、3度の船で台湾へ。
- ~39年 宝鷄→漢中→成都→峨眉 約二万箱

日中戦争終結後、国共内戦激化、国民党劣勢顕著に

上の枠内の経路について、いくつか補足します。

①の補足 ■まず、2万箱が5回に分け、鉄道で、鄭州、徐州経由、南京の長江対岸浦口へ送られます。

③の補足 ■うち、7千余箱は、南京から、徐州経由で宝鷄までは列車輸送です。最後の列車が発出したのは、1937年12月、日本軍の南京入城直前でした。李同源はこのコースに随います。宝鷄→漢中→成都是トラック輸送です。雪の秦嶺山脈を越え、やっと漢中に着くと、更に奥地、成都への命令が待っていました。橋のない川を木舟にトラックを乗せて渡たり、蜀の栈道で有名な崖っぷちの狭道を走り、やっとのことで成都に着きます。

さすが陳さんです。こんな難路、トラックに揺れながら、若い科長に杜甫の詩「劍門」を吟誦させます。まだまだ、遷運は続きます。

それから7年、国共内戦が続く1947年、南京に2万箱が全数帰還します。

『青玉獅子香炉』、クライマックスはこれからです。

石角は皆北に向かう	連山は西南を抱き	劍門は天下の壮たり	惟れ天の険を設くる有り	劍門 杜甫
-----------	----------	-----------	-------------	-------



青玉獅子香炉イメージ



「劍門」日中平和観光（株）のサイトより



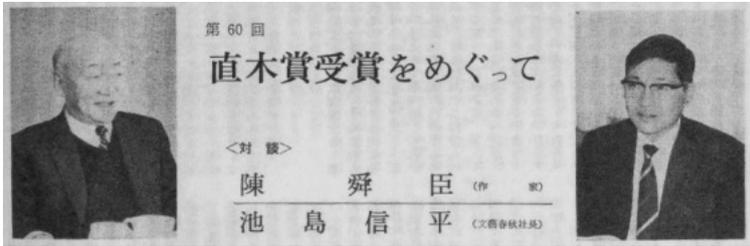
陳舜臣さん『青玉獅子香炉』の執筆動機を語る

『新刊展望』昭和44年4月号の池島信平連載対談、「第60回直木賞受賞をめぐって」に陳舜臣さんが登場し、受賞作『青玉獅子香炉』の執筆動機について次のように語っておられます。ちょっと長くなりますが、非常に興味深い内容ですので、引用します。ただ、陸游の「秋興」がモチーフというのは、難解ですね。

あの「青玉獅子香炉」でもあれを書く気持ちになったのは、去年かおととしに故宮の博物院の四十周年があって創立以来そこにおいて、まだ台湾で健在の那志良という人が「故宮四十年」という本を出して、台湾で非常に評判になった。それを読んでるうちに、ああいうスケールの大きいあれを書いてみようという気持ちになったんです。

(中略)

故宮の文物を陝西省の西安の横にある宝鶏という町に疎開するんですが、書こうと思ったのは宝鶏の町が出てきたときで、あれは宋の時代に国の半分を金にとられまして、ちょうどそこが国境線になってるんですよ。宝鶏は昔の長安、いまの西安のすぐそばなんです。それで、陸游の詩に、役人になって宝鶏に行つてすぐさまに長安があつて、昔は自分の国の古都だったけれどいまはとられてる。それを取り返したいというので「あしたに宝鶏を発して、暮れに長安……」とうたった詩があつて、非常に心に残つておりましてね、宝鶏という地名が出てきたときにこれを書こうと思ひまして、そのモチーフはその陸游の詩なんです。あの作品の中に杜甫の詩をちよつと引用しましたが、陸游の詩は引用しなかつたんです。あれは私のモチーフ



フで、あれを出してしまえばこれはしまいだという感じがしたんです。陸游の詩「秋興」を左にあげます。陳さんがおっしゃっている「あしたに宝鶏を発して、暮れに長安……」は最後の句です。傍線は編集委員です。

秋興 南宋 陸游
成都城中秋夜長
燈籠蟻紙明空堂
高梧月白繞飛鵲
衰草露濕啼寒蟬
堂上書生讀書罷
欲眠未眠偏斷腸
起行百匝幾歎息
一夕綠髮成秋霜
中原日月用胡曆
幽州老酋著柘黃
滎河温洛底處所
可使長作旃裘鄉
百金戰袍鵬鶻盤
三尺劍鋒霜雪寒
一朝出塞君試看
且發寶鷄暮長安

補足 「中原日月用胡曆」
「中原」は中国の中心部、黄河中流域。そこが「胡曆」、つまり、異民族の曆を用いるということは、支配されているということ。す。

陳舜臣『青玉獅子香炉』133枚短編 第60回直木賞選評

川口松太郎	力作が多く作家としては既に一家をなし、直木賞を受けて当然の実力者である。作家の構成力が感じられて、読後感も強く力を持っている。恨むらくは前半の精細な描写に較べ、最後のうら返しがぞんざいで、もっと手をこませて書く必要はあった
石坂洋次郎	すぐれた作品だったが、同源の香炉に対する執着が神がかっていて、いま一つ必然性が不足していると思った。しかし正面から読者を押してくる佳作であることはたしかである
大佛次郎	政治的変動に揉まれながら流転する人間の姿が面白く、また変転を続ける時代そのものもよく生かしてあると思った。日本の作家が容易に持ち得ないのびのびと大まかな風格を、このひとは持っている
村上元三	材料に比べて、この作品の人物関係や、素英の獅子香炉に対する執念が稀薄のようにも思うが、同じ作者の「阿片戦争」をわたしも買っているし、当然こちらで直木賞を受けてもいい作家だと信じた
松本清張	受賞作は陳氏のものとしてはとくにすぐれたものではない。題材からいっても氏の薬籠中のものだから氏としては平均作の上質の部類だろう。ということは受賞以後の活躍が間違いないことである
誰の評？	背景の歴史的出来事の記述が多すぎて、香炉をめぐる人物が押しつぶされそうになるのも気がかりだった

川口～松本はウェブサイト「直木賞のすべて」より抄録。原出典は『オール讀物』昭和44年4月号上の評、私(橘)は、「誰の評？」にもっとも納得です。

陳舜臣さん、老いを語る

いい文章に出会いました。2010年4月6日付毎日新聞の記事です。「天災も大病も嘆いても始まらない」「志 いつも曹操」、喜寿を過ぎた私も、この言葉を座右の銘とし、老いを生きたいものです。

なお、記事中、曹操の詩の活字が小さいので、ここに補います。驥老(老驥?)伏櫪 志在千里 烈士暮年 壯心不已 ■驥は名馬。櫪は飼馬桶、厩。(編集委員 橘雄三)



ちん・しゅんしん 作家。1924年神戸市生まれ。43年大阪外国語学校(現大阪大学外国語学部)卒。61年「枯草の根」で江戸川乱歩賞受賞。69年「青玉獅子香炉」で直木賞受賞。71年「実録アヘン戦争」で毎日出版文化賞受賞。日本芸術院会員。本籍は台湾だったが90年に日本国籍を取得。
—幾島健太郎撮影

神戸の街そして陳さんの歩み	
神戸大水害	38年
2度の空襲	45年
阪神大震災	95年
	08年1月

研究生活を送りながら出征する友人を見送る

作家として活躍

脳内出血で倒れる。涙を流しながらのリハビリで回復

退院4日目に被災。復興の様子を見つめる

再び脳内出血。左半身にまひ



受けました。43年に私は大阪外語を繰り上げ卒業し、母校の研究所の助手をしていました。出征する友人は学校に寄り、別れを告げにきます。おそらく二度と会えないだろうと、お互い分かっています。お互い分かってはいますが、それを口に出すことはできません。普段通りの別れをしました。無常感を味わいました。

94年8月、70歳の時、脳内出血で倒れ9カ月入院しました。この時は、精神的にも肉体的にも衰えを感じました。特に作品を推敲している時に、着想があっても、それを頭の中からスムーズに取り出せないと感じた時は、病と死を二重に意識しました。

震災に遭ったのは退院して4日目です。体が動かなくなったことと震災の悲惨さが重なり、生への執着が薄れ、悟りの境地に近いものを感じたこともありました。それは虚無感のようなものではありません。

神戸が過去2度の災厄に続き、3度目の災厄からも立ち直る姿を見ることができたことは心強いことでした。ボランティア活動が活発になり、「日本のボランティア元年」となったのはうれいことです。人を信じ、愛を感じ、互いに助けあう精神を身につけました。神戸が率先して、民間や行政を網羅した先進的な地域になってほしいと思います。私もリハビリに積極的に取り組まれました。今度は左半身、2年前の08年1月、83歳で再び脳内出血に襲われました。今度は左半身の不調が進行し、前例のないスピードで人口の高齢化が進む日本。しかし、どれだけ平均寿命が延びても、老いの先に死があることは変わらない。長寿とは、老いの期間が延び、死を考える時間が増えることでもある。それぞれの分野を究めた先達は、老いをどう迎え、向き合っているのだろうか。その言葉から老いを学んでいきたい。

（編集委員・鈴木敬吾(67歳)）
次回回は5月4日掲載予定

[おおさか発・プラスα:老いに学ぶ]

老いに学ぶ

陳舜臣さん

作家

1924年2月18日生 86歳

天災も大病も嘆いても始まらない

志いつも曹操

神戸大水害で、神戸は泥の町になりました。2回目は空襲です。45年3月と6月の2回の空襲で、文字通り神戸は灰燼に帰りました。そして最後は95年の阪神大震災です。

21世紀の今、振り返ってみると、そのすべてを体験した私は、神戸とともに働いた世帯を生き抜いてきたのだなと感じています。人の生と死について深く考えたのは、あの戦争でした。友人の戦死の報に接するたびに大きなショックを受けた。

それは虚無感のようなものではありません。

取り組みました。95年の4月から朝日新聞に「チンギス・ハーンの一族」の連載が始まりました。右半身まひで右手が使えなかったのに、最初の二十数回の原稿は左手で書きました。それでも、動きにくい右手も無理にでも使わなければ機能の回復が遅れるので、左手を支え右手で書くようにしました。2年間の連載で2,000枚以上の原稿はそうして書いたと思います。

リハビリは厳しかったので、医師から「家族が鬼にす。医師から「家族が鬼にす。医師から「家族が鬼にす。」

老いたる驥(名馬)は櫪に伏すとも志は千里にあり。烈士は暮年にも壯心已あらず。

老いたる名馬は厩で寝そべっていても千里のかなたまで走ることを夢みている。男は老いてなお意気盛んでなくては、という意味です。

また生かされた、と感じています。それはまだ作家として書き残したことがあるからだと思います。生きている限り、仕事をしたいという気持ちを見失わず、前へ向かって行くつもりです。

前例のないスピードで人口の高齢化が進む日本。しかし、どれだけ平均寿命が延びても、老いの先に死があることは変わらない。長寿とは、老いの期間が延び、死を考える時間が増えることでもある。それぞれの分野を究めた先達は、老いをどう迎え、向き合っているのだろうか。その言葉から老いを学んでいきたい。

（編集委員・鈴木敬吾(67歳)）
次回回は5月4日掲載予定

香炉の銘に関する抗議

『陳舜臣全集 第二十三巻』(一九八八 講談社)の稻畑耕一郎氏の解説に次のような記述があります。

『青玉獅子香炉』の直木賞受賞は台湾でも評判になり、すぐに翻訳が出た。それを讀んだ故宮の関係者から、いくつか抗議が出された。その一つは、陳舜臣さんは、香炉に「乾隆三十四年」の銘があると書いているが、玉器の銘は「乾隆年製」「乾隆仿古」とあるだけで、年数をつけたものは絶無だということである。これについて、陳さんは、「無知のいたすところだった」、「機会があれば訂正し」たいと述べている。

左に上げたのは陶磁器ですが参考にはなりません。